

## 弔 辞

加 藤 正 信

謹んで国語学会代表理事故徳川宗賢先生のご霊前に捧げます。

先生は、国語学会の代表として、全国二千五百人の国語学、日本語学の研究者の頂点に立つリーダーとして、日夜斯学の発展に努力され、その学殖、業績、実行力、そして包容力のあるお人柄により我々研究者を導いてこられました。今、先生を現職の代表のまま急に失うことになり、私ども全国の学会員一同深い悲しみに暮れているところであります。

偉大なるリーダーを失ったことで、私などは茫然自失の体であり、学会から誰がどういう立場で発言を捧げるべきか迷うものであります。が、学問上最も近くてお世話になっていた後輩の一人である私が僭越ながらこの場でお言葉をさしあげることをお許しく下さい。

顧みますと、当国語学会が戦争末期に発足し、戦後の混乱から抜け出して漸く社会が高度成長にさしかかったころ、それと時を合わせるような人材として、徳川先生が岩淵悦太郎代表理事のもと、学会の要ともいふべき庶務主任の役で積極的に活躍され、学会を活性化されたことは衆目の一致するところであります。

また、機関誌『国語学』の編集委員長兼春秋の全国大会の運営委員長、そして学会理事を長年つとめられ、二年前からは代表理事となり学会の総責任者として学問の進むべき道をリードしておられました。

この間、御専門の方言研究、言語地理学で多大の業績をあげられ、枚挙にいとまありませんが、有名なもののうちの一つを例に挙げれば、国立国語研究所の『日本言語地図』について、企画・調査の十年、整理・作図・考察・全六巻の出版の十年、計二

十年、その全工程に関わり、常にその仕事の中心として活躍されたことで、これは国内外の学界周知の事実であります。

先生は、日本の方言研究の指導者として、発足以来三十年に及び日本方言研究会の幹事、世話人をしてもらったほか、日本語学会、日本語教育学会の役員を、また、最近は新しい学問である社会言語科学会を設立し、その会長をもつとめておられました。さらに広く、国語審議会委員、日本学術会議会員として、国の言語政策、文教政策にも重要な提言をされてきました。

このように各方面にわたる御活躍の全貌は私ごとき者には到底把握し得ないところなので、いま、その個人的な思い出の一つだけを述べさせていただきます。国立国語研究所の少壮研究者徳川宗賢所員が、日本語地図のために地方研究員の指導に私と同行調査をした際のことです。そのお生まれからは想像できないような県境の田舎の農家のほりだらけの縁先に腰をかけたところ、出されたお茶の中に虫が入っていたのを、注いでくれたお婆あさんが後ろを向いたすきにひよいとつまんで出し、お婆あさんがこちらへ向き直った時には、そのお茶をおいしそうに悠然と飲み干して調査を続行した、あの光景は、私には強烈な印象として何十年も頭に焼きついております。真に高貴な方とはこういうものかと。そして、調査とはかくあるものだと。

徳川先生の、出身や身分や年齢にこだわらない分けへだてのない接し方、特に誰がどんな論文をお送りしてもすぐに感想をしたため激励して下さること、ユーモアと思いやりのある談論風発ぶり、その学問的業績、統率力、国際性は全国に、また世界に多くの「徳川ファン」を自然に作りあげていました。

その徳川先生が多くのお会を抱える大世帯、伝統ある国語学会の改革を若い頃から夢見ておられ、のち、その有言実行ぶりを發揮して中樞で仕事をし、特に、代表理事の任にあつては勇氣と責任をもつて、しかも慎重に手をつくした結果、改革がある程度実現しかけていた矢先に急逝されたことはかえすがえすも残念でなりません。

誠実につとめられた御心労が災いしたか、私どもの補佐が至らなかつたか、痛切に悔み、反省しております。日本語教育学会に国際交流委員長として御出張中に倒れられたと伺っておりますが、考えてみれば、学者徳川、学会人徳川の生き方を象徴するような、まさに壮絶な最期であつたと言えましよう。

今となつては、休むことなく常に研究と学会の発展に腐心されていた徳川先生の御霊に、深甚なる感謝と尊敬の念をもつて、今こそ安らかにお眠り下さいと申しあげしかありません。そして、また、その温かいまなざしで、我々後進の努力、学問・学会の発展を、さらに高いところから見守って下さることを願っております。

ここに、心から故徳川宗賢先生の御冥福をお祈り申しあげ弔辞といたします。

平成十一年六月十一日

国語学会理事 加藤 正 信

〔筆者注〕

学会誌に載ることになった以上、当日の弔辞の至らぬ点を修正すべきだと念じていたが、思い余ってまとまらず、結局、若干の字句の訂正を行ったのみで提出することとした。悲しみと混乱の中の一夜漬りで、舌足らずではあったものの、それだけに、その時の生で、真摯な気持ちのままが出ていると了解していただければ幸いである。

当日の上野寛永寺における弔辞は、学習院大学、国語学会、大阪大学の順で三つだけ、各五分に決められたと伺っていたので、年譜的なことや両大学関係事項は省き、それ以外の、国立国語研究所、他学会との関係について一言触れるようにした。また、学会・大学以外の多方面からの参列者のことも念頭におき、説明的にせざるを得ない面もあった。勝手ながら、調査の思い出も一つ入れさせていただいた。その同行調査とは、『日本言語地図1・付録』の記録によれば昭和三十三年の宮城県山元町坂元のもの（ほか、大学院生一名が見学）であった。六月六日の代表理事の急逝から数か月、故人の重さが国語学史的な意味をもって、客観的にも迫りつつあるのを感じている。

（九月三十日）

——いわき明星大学教授——